

1990/8 No.3

ooca

会協工芸美術建築日本





## 地球市民と町づくり



建築家  
柳澤孝彦  
(社)日本建築美術工芸協会  
広報委員長

今二つの世紀末がある。

その一つは、社会主義国の急激な民主化が、なかならず東ヨーロッパを席卷して、当該地域や一国の出来事にとどまらず、世界の体制の枠組みの変化を一気に地球規模へ発展した拡がりである。

その二には、地球環境の急激な悪化がある。環境が大きなストレスを受けていることを示す危機現象が実証され、いよいよ危機が確実なものとして姿を現して、人々の日常生活や感覚に直接的に触れるかたちで、地球という規模での環境悪化の意識が顕在化されたことである。

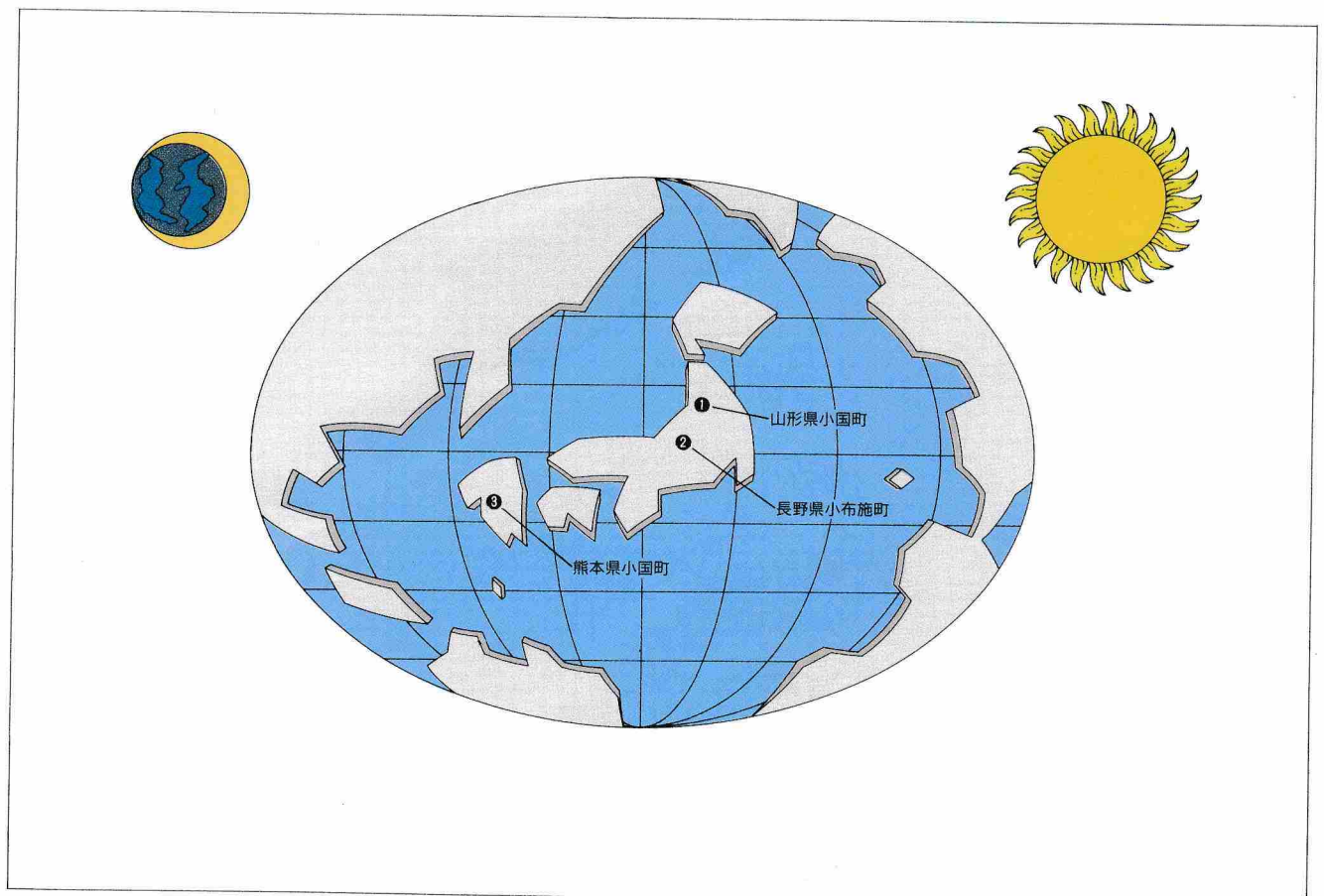
かような世紀末は地球をいよいよ狭いものにして、地球の裏側はおろか宇宙をも手元に引き付けてしまう程の情報の世界的流通が、いずれも日々の生活に程遠くあった地球的規模の環境や、世界的体制の枠組みなどというグローバルな意識空間の中に私達を日常化して来たといえよう。

このようなグローバルな意識空間に住み始めた現代では、情報流通の普遍化にともなった生活文化の急速な画一化と共に、普段の生活を基盤とする日常性の稀釈をも促進させてしまう。

かような状況の現在、グローバルな意識

空間の中に、自己の存在を確かめようとする次なる現代が創り出されつつあるという点に、私たちは注意を払わねばならない。それは、いつのまに希薄になってしまった足元に、常に情報の受信者であることよりも、その発信者としてのアイデンティティを基盤にした日常性の回復を発見しようとするものである。

歴史的都市への見直しも、下町の風情に「ふるさと」を改めて掘り起こそうとするのも、私たちの足元からの再出発の足びみである。本号に於ける地域の町づくりの紹介は、それらの健脚ぶりの特集である。





## 町民と共に芸術を



彫刻家

建島 寛造

東京都豊島区巢鴨3-14-29  
TEL. 03-918-3091

山形県の小国町は、かつて陸の孤島と言はれ、1年の中の半分は雪に閉され、全ての交通は途絶えていたと言われている。1名「マタギの里」と呼ばれていた比の町も、今は道路も整備され、除雪も機械化が進み、往時の様な不便さは解消されているが、近くに飯豊山塊や樺の原生林をひかえ、豊かな自然の懐に抱かれた素朴な美しい町である。そんな町に昭和61年、同じ町出身の著名な建築家本間利雄氏が設計された素晴らしい町役場が落成した。私は其の建築の披露パーティーに招かれて出席したが、比の建築は私が今まで見て来た公共建築の中でも殊に優れたものであった。と言うのは、此の様な地域社会に根差した周到な心配りと、そして小国の自然と融和したゆとりある佇まいに、現代建築の機能が美事な調和を保っている事である。此の建築の落成に当って、本間氏と昵懇の土谷武さんと、そして私の彫刻が其の中に置かれる事になったが、其の事は別にして、現代彫刻が建築に場を得るとするならば、此の様な建築空間こそが望ましいのではないかと私共には思われた。

たまたま此の様な願望が実り、昨年本間利雄氏の肝煎りで、8人の作家による現代

彫刻展が此の町役場の内外を使って催される事になった。此の企画は本間氏と今町長を始めとする町当局によって進められたが、其の運営は先に述べた土谷氏を始めとする8人の彫刻家に委ねられ、私も其の末席を汚す事になった。そこで我々は此の展覧会のコミッショナーとして、国立国際美術館々長の三木多聞氏に、其のコンダクトをお願いする事にした。其んな訳で、ここに三木多聞氏の此の展覧会の紹介文の一部を省略紹介させていただくと、『此の展覧会はいくつかの大きな特色をもっている。第一は、

現代の第一線で活躍するベテラン彫刻家によって自主運営されたものである事。第二には、此の展覧会が、美術館やギャラリーではなく、小国町役場とその前庭を場に開始されたことである。』と言うことになる。そして三木多聞氏は此の建築について、『隅々まで設計者の透徹した構想と繊細な配慮が行き届いた魅力ある建物である。』と言われている。建築が抱擁するスペースのゆとりと言おうか、各々の作品は其の所を得て、小国町の素朴な町民と現代彫刻とのゆくりない出会いの場となったと思われる。

おぐにKOIZUMIWA彫刻展'89 4階会議室





## 風土に根ざした共生の空間を！



山形県小国町長  
今 功夫  
〒999-13 山形県西置賜郡小国町  
大字小国小坂町二丁目30番地  
TEL. 0238-62-2260

役場は最後に。——小国町のまちづくりの底にある考え方である。まちづくり軌跡は、端的に、生活圏構想(40年代)、産業圏構想(40年代後半～)、自然教育圏構想(50年代～)の3つの計画構想で表現できる。

各計画構想に基づく諸施設の設計には、本町出身の建築家本間利雄氏に携っていた。氏は、町が持つでっかい自然と人々の営みと施設をコーディネートし、常に、地域環境に磨が加わるデザイン(形態とその機能)を提案されてきた。

これらの施設は、単体としてではなく、小国町の地域開発という総体の中の機能として評価を受けてきた。これが、過疎、山村、豪雪、陸の孤島などと言われてきた小国を、先端山村へと導いてきた。

### (タウンホールとKOIZUMIWA彫刻展)

芸術とは永続的な感動である。というコンセプトで地域開発を展開しており、先駆的な情報の発信と交流を通して創造的精神の涵養に努めることを重要施策にしている。

タウンホールの建設にあたっては、町民のために役に立つ場所であることを念頭に、二度ご奉公できる施設づくりをめざした。いつの日か、役場が役場として機能しなくなった時に、例えば、美術館や博物館、ホテルとして利用される建物として、後世に残るものとして造った。内装は町の木である広葉樹を使い、潤いと安ぎの空間づくりに配慮した。さらに、新しい世代が求める空間づくりを行った。それは、前庭の森の造成であり、無雪の空間づくりである。こうした試みは、新しい街並み空間の形成にインパクトを与えていくこともねらいとした。

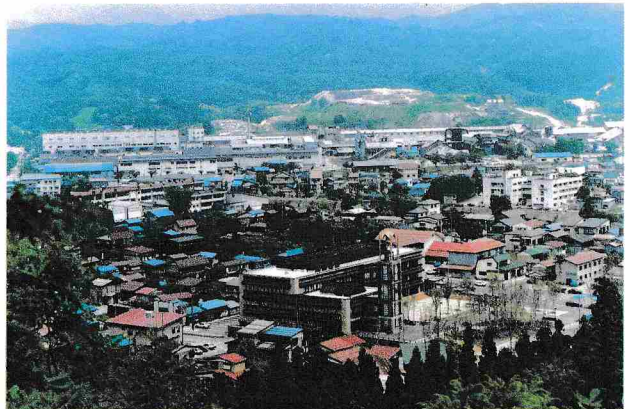
庁舎内には、芸術作品を配置し、文化的な雰囲気づくりをした。2階町民ロビーには会田雄亮氏の陶壁、土吞武氏の彫刻、柏

倉清助氏の油絵が、3階応接ロビーには建島寛造氏の彫刻があり、訪れる人に語らう。さらに4階の議会廊下と会議室の空間には、役場ギャラリーの機能を設けた。また、2階ロビーにはグランドピアノを配備した。これらの空間では、柏倉清助氏の個展や服部公一氏のコンサート等が実現されている。

諸先生方には、地域情報を巧みに表現していただくとともに、情報発信の新しい提案を賜って来た。昨年4月、改築した町立玉川小中学校の多目的ホールに彫刻の配置をいただいた時に、土吞先生から「東京で出来ないグループ展を小国で開こう」と提案を頂いた。

東京で出来ない、というテーマを実現する素材、それは「ブナ」だ。ブナは神の造形芸術の極であり、彫刻は人間の造形芸術の極である。この二つの極芸術の競演と融合のイベントとして『KOIZUMIWA 彫刻展』を企画した。国立国際美術館長の三木多聞氏にコーディネーターをお引き受けいただき、現代彫刻界で活躍されておられる8名の先生方(建島寛造氏、土吞武氏、加藤昭夫氏、城田孝一郎氏、保田春彦氏、掛井五郎氏、鈴木実氏、澄川喜一氏)のご支援を受け、グループ展が役場片舎で実現した。

コイズミワとは、小国町に残っているマタギ言葉で、神に豊猟と息災を感謝して発する。それは、美しい自然と調和した人間の営みを誇りをもって自己主張する強い男の雄叫びにも聞える。彫刻展は、美しい自然と美しいこころの表現を、誇りをもって



小国町役場



おくにKOIZUMIWA彫刻展'09 町民広場

他に発信する情報であることから、マタギ言葉を冠にした。

このイベントで、東北7県をはじめ、東京圏からお越しいただいた多くの方に、小国を認識してもらうことができました。また、会場準備を通じ、人間の感動を呼ぶ空間を醸し出すことの意義を職員は学んだ。さらに、先生方からは、彫刻は「空間との契約」である、という言葉聞き、これからのまちづくりに大きな示唆を受けた。観光開発ではなくふれあい開発を展開することによって人々(生活者や交流者)に新しいシーンを提供できるという自信も得た。

タウンホールの建設から彫刻展までの試みの中で『衣食足りて礼節を知る』時を迎えたことを痛感した。



## 小国町役場 — 文化的拠点への可能性 —



建築家  
本間 利雄

小国町役場は1986年3月に完成した。庁舎に付随したカリヨンのあるシンボルタワーが特徴的で、町民広場やアプローチ、駐車場が配置されている。

小国のこれまでの地域づくり、公共建築づくりは常に話題性を伴っていた。それは地方独自の情報の発信であった。だからこそ役場も地域のアイデンティティを持つ建築として、新しい地域文化の創造の媒体となるものに、同時に地域の人々が誇りをもち、愛着の寄せられるように。それがこの

町で生まれ育った建築家としての責務と考えていた。

この建物では近くの工場の電気炉の排熱から造成した温水を暖房・給湯・消雪に活用しており、地域エネルギーの有効利用という点から特徴ある建物として評価を受けているが、同時に文化的・芸術的雰囲気の色濃く持つ建物でもある。

山村らしさを漂わせながらも、地域という枠を超えた普遍的な精神の豊かさ、文化の恩恵に常に浴することのできる場。ある

いは建築空間としての表現だけでは到底味わうことのできない芸術性豊かな文化的雰囲気。それを生成するために、2階町民ホールに金田雄亮氏の陶壁「山霞」、土谷武氏の彫刻「風」、その脇のラウンジには柏倉清助氏の油絵「樽口峠から」が置かれた。さらに町長室等を抱する執行部門のホールには建畠寛造氏の彫刻、「WAVING FIGURE」がある。

当然のことであるが、町の深い理解があつてできたことである。そのうえで町の芸術作品に対する考え方や、私共の意図に、芸術家の方々が深く共鳴されたからこそ、それぞれが実に生き生きと各空間の焦点となつて、味わい深い雰囲気醸し出しているのだろうか。

役場が完成した後も機会あるごとに、町は澄川喜一、朝倉響子両氏の彫刻やその他の絵画など何点かの芸術作品を購入し展示している。町民ロビー内外はさながら美術館の雰囲気もある。

しかし文化的な環境を町民にただ提供するだけで終わってはいない。庁舎計画当初より町は町民ホールや4階の会議室、町民広場などを音楽コンサートや展示会などに活用したいという積極的な姿勢を示していた。したがって本来の役場機能を越え、役場が町民の文化交流の媒体となつて、数々のソフト展開が継続的に試みられているところこそ高く評価されるべきだろう。

例えば、町民ホールでは作曲家服部公一氏を中心に「愛の町プロムナードコンサート」と銘打ったミニコンサートなどが度々催されている。また画家の柏倉清助氏は個展を4階会議室や廊下を利用して開いたこともある。

これまでで最大の展覧会は昨年10月に、

町民広場と4階会議室を利用して行われた「おぐにK O I ZUMIWA彫刻展」である。掛井五郎・加藤昭夫・城田孝一郎・鈴木実・澄川喜一・建畠寛造・土谷武・保田春彦氏(ともに彫刻家)が集めた素晴らしい企画展であった。そのオープニングセレモニーでは彫刻家の方々と町民との直接的な交流が和やかに繰り広げられたことも忘れられない。



小国町役場





芸術に接する機会を町民に提供する代替的な施設として役場を考えるのではない。生活の場、あらゆる場所が、創意や工夫でコンサートホールや美術館になり、地域住民が共に芸術を享受し文化交流の拠点となる、そのひとつの例と考えたい。

この小国町は1987年に社団法人経済同友会(石原俊代表幹事)の第2回「美しい都市づくり賞」で最高の建設大臣賞に輝いた。選考委員長の芦原義信氏は「みんなで頑張っている町」と評されたが、この言葉は町民総意の町づくりへの励ましでもあった。現在の町の文化的活動へ大きな影響を与えてくれたようにも思えてならない。





## 小布施の町づくり



町長  
唐沢彦三  
長野県上高井郡小布施町  
TEL. 0262-47-2678

「北斎と栗の町」「おぶせ」は、自然に恵まれた美しい農村風景と、江戸時代の老舗がよく似合う小さな町である。

### ◎町づくりのはじまり(コンセプト)

文化というものは、もともとローカルなものである。建物、生活、食、書画等はすべて地方特有の歴史、伝統、風土から生まれた文化である。そこで「小布施らしさ」をそこに住んでいる者が共通に誇れる文化を育てることが町づくりの基本理念としてきた。

歴史と伝統のある住民共通の資産として意識のもてるもの、それは、文化の醸成と産業の育成である。昭和51年「北斎館」を建設して、本町ゆかりの葛飾北斎の肉筆画の展示館を開設した。栗は、小布施に600年の歴史がある。江戸時代から栗羊かんを始め、栗菓子は信州の名菓として知られている。人が集まれば界限ができる、経済活動が活発になる、次の美術館、博物館が建ち、江戸の風情がある店舗が次つぎにできる。又人がより多く集まる。

### ◎町づくりゾーンの設定

町づくりの基本理念にもどづいて事業を進める具体策として3つのモデルゾーンを設定し、他への波及効果をねらって進めた。

#### ①北斎館、鴻山記念館周辺歴史文化ゾーン

ここは、北斎館や美術館、博物館などがあると共に、老舗を誇る栗菓子店や大壁づくりの民家が江戸末期の商業活動を物語る歴史的景観をとどめているところである。ここに「町並み修景事業」を導入し、景観の保存、伝統建築と新建築の調和による空間的な味わいの現出と、地域の文化醸成の場として、又住民の利便性を配慮して整備した。

#### ◎岩松院周辺ふる里ゾーン

畳21枚分の北斎の天井絵鳳凰図や、福島正則の霊廟のある岩松院、重文薬師堂があり、雁田山を背負って一帯は歴史と緑、そ

して心のふる里、田園風景がよく似合い、古い民家と新しい感性が調和したところである。

特産の栗、りんご、ぶどうなど目で楽しみながら、本物にふれ合う喜びをかみしめるため、ふる里緑道、自ら体験する「ふる里創造館」などふる里景観を見直す視点で

整備した。

#### ③さわやか駅前ゾーン

文化の町にふさわしい景観と商店街であるさわやかな雰囲気駅前広場、互ぶき大壁風の駅舎、日本庭園、又四季の花が植えられる花壇のあるポケットパークを始め、駅前商店街を花で飾り、住民自から管理す





るゾーンに整備した。

◎これからの町づくり

これからの町づくりに最も必要なことは、  
①快適空間、②美しさとおしゃれ、③地域  
コミュニティーであると思う。

そこに住む人が環境のよい美しい町に住  
めるために、誰でもきらう人がいないもの、  
それは花である。公共施設、駅前、道路な

ど、空間に花を植えること。花を植えるこ  
とは、住民誰でもできることで、土づくり、  
草とりなどによって、3世代の交流の場  
になり、地域コミュニティーの育成の場でも  
ある。同時に生命の尊さを学ぶこともできる。  
そして今、花は私達の日常生活に欠かせる  
ことができないほどになってきた。従って  
これは産業として定着を図ることもできる。

町づくりに欠かせないものにもう1つ、  
それは「おしゃれ」おしゃれな住まい、おシ  
ャレなお店、オシャレな服、オシャレな食  
事、オシャレな会話、オシャレな街である。  
押つけがましい行政でなく、自分たちの発  
想で夢のある地域づくり、心の美しい町づ  
くりを進める感性のある町でありたい。

配置図(建築文化'87年6月号より)





## 「居住者主導型の修景事業」



小布施堂 主人  
市村 次夫  
〒381-02 長野県上高井郡小布施町808  
TEL. 0262-47-2027

「家族で相談した結果、その計画に参加させてもらいます。」この瞬間、「この計画は実現する。」と直感した。

小布施町並み修景事業は、民家二軒、長野信用金庫、小布施堂(栗菓子屋)そして町当局の五者が共同で実施した事業である。

企画の経緯は、まず町が高井鴻山隠宅を一般公開することを公表し、それに呼応して私とS氏及びI氏の民家二軒の三者が周辺のあるべき姿を話し合ったことから始まった。

S氏には九十歳になる母上がおられ、I氏は七十五歳の高令であった。お年寄にとって、家を建て替えるということは、かなり心理的に抵抗のあることではないかと考えていたところ、二軒共そのお年寄が一番積極的に賛成してくれているという。

地域の後輩としてこの先輩の奮起には本当に感激した。そして心に誓ったことは、この計画地域の三百年に及ぶ時の流れを可能な限り読み取ろうということだった。

例えば当該地域には、各々の敷地を横に貫く用水が流れているが、その護岸の石積がお宅によって異っている。そこには各

々のお宅の祖や人の思いや工夫が凝縮されているし、納屋のような建物としての序列の低いものであっても、或建物は何度か移築され、また或建物はこの町の大火(宝暦四年)に遇いながらも生き残ってきた。

こういう一つ一つの歴史の記号性を解読し、建築家に正しくインプットしていくことこそ、我々施主の責務であると確信すると同時に企画の第一歩であると考えた。

次に考えたのは、土地の売買をせずに建物等を再配置できないかということである。

これは替地や土地の賃貸借を駆使すれば可能ではないかとの見通しを立てて進めたが、その際、土地の賃貸料をどの位に設定するかということが課題となった。

一般的には、地価の何パーセントというような決め方になるのであろうが、それに対して疑問を感じたのである。土地の売買事例の多い(土地の商品化が進んだ)都会地ならばともかく、およそ売買事例の少ない田舎で、そもそも土地代の相場という考え方自体が妥当であるか否かという点である。

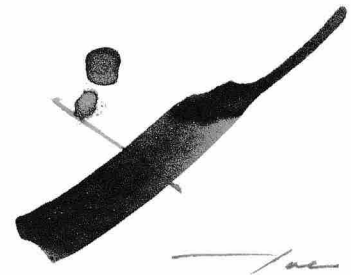
民家二軒は敷地内の裏手に新築移転し、表の方を賃貸するのだが、その賃貸料と新

築に伴う借入金の元金返済額を等しくするというようにした。

即ち、相場という考え方を採らず、この修景事業により個人がリスクを負うことのないようにするという考え方を採った訳である。

その後、長野信用金庫、町当局を加えて五者会議を構成し、修景事業はその完成迄、常にこの会議と宮本忠長建築設計事務所によって主宰されていった。

本事業の最も意義ある点は、この居住者主導型の方式にあるのではないかと考えている。





## 小布施の町づくりと宮本忠長氏



地理学者  
東京学芸大学教授  
**市川 健夫**  
東京都小金井市貫井北町4-1-1  
TEL. 0423-25-2111

### (町づくり戦略)

小布施の町づくりは1974年から始められた。1973年秋の第一次石油ショックによって、日本経済は低成長期に入った。このようなきびしい状況のもとで、小布施町においては、経済の高度成長期のハードな地域開発ではなく、ソフトな面の発展計画が樹立された。それは葛飾北斎の美術館を核に、町並みの修景保存事業と、栗菓子という風土産業とを結びつけた、きわめてユニークなプランであった。

小布施は北信濃にある人口12,000ほどの小さな町だが、その地域性・風土性はきわめて個性的である。江戸中期以降、小布施では綿花栽培→綿布生産、菜種栽培→菜種油の製造が盛んになり、主として河戸へ送られて商品化された。その結果、豪農、豪商が数多く生まれた。富を蓄えた彼らは、北斎を4回にわたり招へいしたが、町内には200点を越える肉筆の北斎画が所蔵され、

ている。近代以降、信州には製糸業が発展したが、小布施ではみるべきよのがなかった。製糸業は“生死業”といわれるほど、景気に支配されるが、この産業が発展しなかったことは、北斎画の散逸を防ぐ結果になった。

### (町並み修景と建築家)

新しい町づくりの企画は、当時町長であった市村郁夫氏の強力な指導力のもとで進められた。その際、町並みの再開発プランは宮本忠長氏に一任された。宮本氏は町立小学校の建築設計をまかされて以来、市村町長の信任を得、しばしば町の公共建築を手がけてきた。この町長と宮本氏との厚い人間的信頼関係が、小布施町における統一的、継続的な町並みの修景事業を可能にし、大きな成果を納めた。

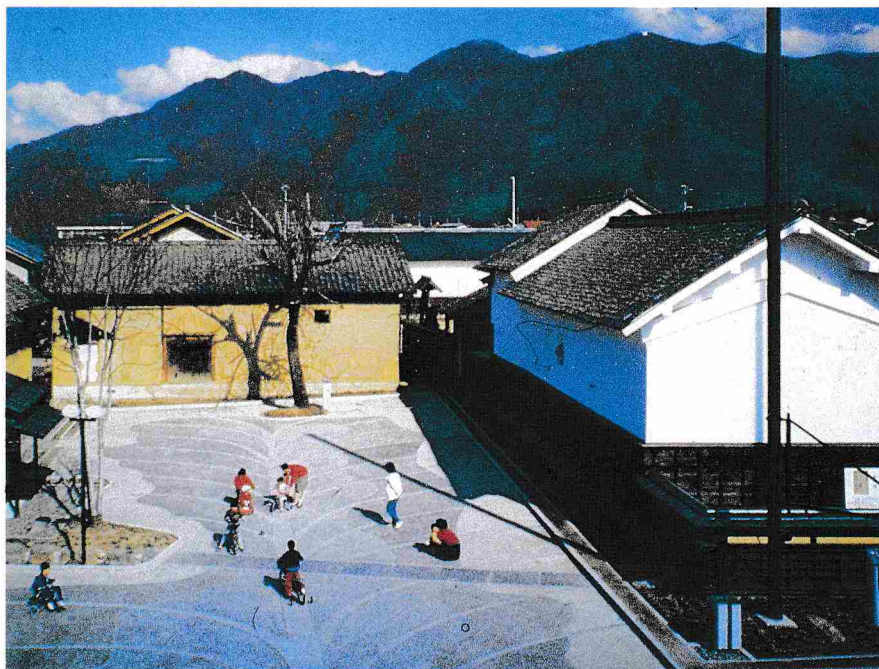
宮本氏と私は、旧制長野県立須坂中学校の同級生であるが、入学当時から彼は父上

の仕事を引き継ぎ、建築家になることを級友に宣言していた。満12歳の少年が確たる職業観をもち、以来終始建築家の道をめざしたところに、現在の彼の存在があると思われる。

宮本氏の作風は、まず風土性を認識することに始まり、自然環境に適応し、また歴史的な伝統をふまえた現代建築を創造する点に特色がある。小布施町の隣接する須坂市に生まれた宮本氏は、主として長野県内の建築を手がけてきた。その中で小布施の中心集落の修景事業は、彼のライフ・ワークの一環だといってもいい。小布施の商店街には、江戸時代から大正期にかけての大壁造りの民家が軒を連ねているが、このような町並み景観を生かしながら、一方では建築材にも使われてきた栗材を舗装道路に用い、またインダストリアル・パークともいべき開放的な菓子工場を設計している。宮本氏の統一的なデザインが、雁田火山などの自然環境とも調和した美しい景観をつくり出し、町内外の人に親しまれている。

### (今後の町づくりの課題)

現在小布施町当局は、農村部を含めた集落景観の再編を意欲的に進め、生活の快適性を高めるとともに、町の活性化にも役立てようと計画している。これには地域デザイナーとしての建築家が必要であり、それには町の風土性を理解している宮本氏が最適であると思われる。





## 町づくりにおける芸術的環境 — 小布施町並修景デザインを通じて —



建築家  
宮本 忠長

### 1. 町づくりにおける芸術的環境

小布施町並修景デザインに取り組むなかで、まち全体を静かな美術館にしようという住民の願望のような雰囲気があった。

約10数年の歳月を重ね、しかも、確たるマスタープランなど持たず、住民（常住者主体）が積極的に取組み、行政（小布施町）が、また強力な支援するなかで、個々の建築の条件を満たすと同時に、建築と建築の空間空地に公益性という機能を与えることを共通分母としてすすめた計画であって、今日、漸く修景が一応の成果をおさめた。

公益性のある空間空地（共通分母）があって、初めて、個々の建築（分子）が生きてくる。

建築（分子）の“まち”・“通り”からくる空間尺度、整合性は、基本的に景観を大きく左右する。しかし、見方を変えれば、個々

の建築（分子）は、脇役で、空間空地（共通分母）こそ主役であると考えてことが肝要。

小布施町並修景は、このようにして組立てられた。

### 2. 公益性と芸術性を帯びた空間

(イ) 笹のひろば。小布施堂屋敷内を開放してくま姫笹で地表を被い、傾らかな曲面、常緑の伸びやかな空間。

(ロ) 栗の小径。栗の里（小布施）らしく、栗の木ブロックを敷き詰めた露地。生活道路として再生。

(ハ) 風のひろば。鴻山館の幟に靡く“風”をテーマに、ひろばの地表に風紋模様を描き、子供たちの集る場。常時は、駐車場。

小布施町並修景デザインが、公益性のある空間空地の創生に座軸を求めて、周囲の歴史的な土壌を背景に、文明と文化の対比、

温故知新、目利と他利の共存。等々を交叉させ、単に彫刻を、まちがどに置いて雰囲気を作る手法で無く、地元在住・原山尚久・木下勝彦の両氏をはじめ彫刻家、芸術派の方々が、最初から参画され、常住者と一体のなかでプロジェクトをすすめることができた。この意義は大きい。

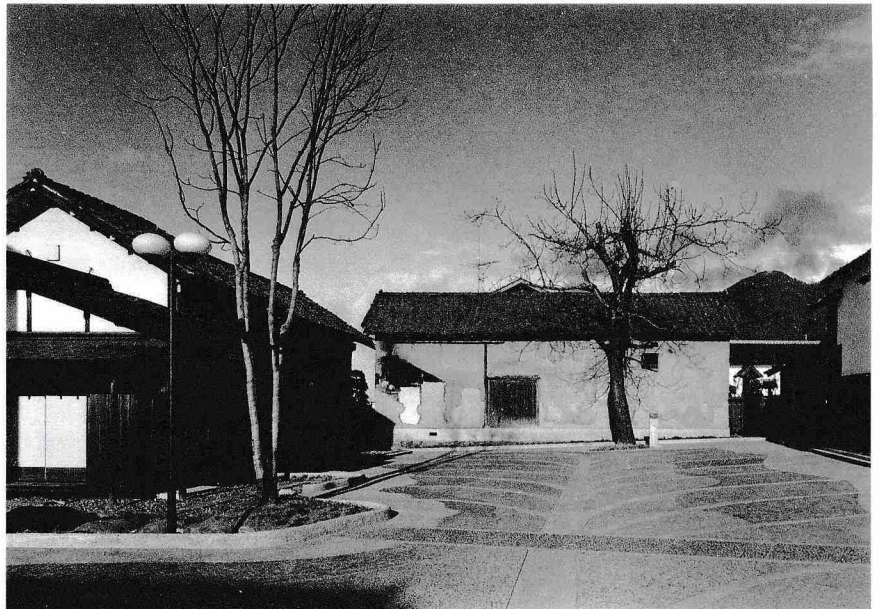
笹のひろば  
小布施堂の屋敷内を開放して、緑のひろばとして創生。  
公益性の大きい生き生きとしたオープンスペース。







栗の小径  
生活道路としての露地空間の再生  
子供達の通学路でもある。



風のひろば  
鴻山館の織の風に靡くひろば。  
これは、信金、小布施堂、鴻山館の共同駐車場でもあり、  
主役は子供達の集るひろば。

修景デザインされた町並み  
小布施堂、長野信用金庫小布施支店、  
風のひろばへのゲート、高井鴻山記念館。





## 地域デザインづくり



宮崎 暢 俊  
熊本県小国町町長

### 1. はじめに

森を歩くと風のメロディー、野鳥のさえずり、揺れる木の葉のすれあう音。静かに耳を傾けると、そんな音が組曲となってなによりやら交響曲を奏でているように聞こえてきます。

1986年、パリ国際版画コンクールでグランプリを受賞した、熊本県小国町出身の画家坂本善三さんは「どんな秩序も自然の中の秩序にはかなわない」と言っています。大きな自然に包まれると成るほどそのとおりだと感じるのです。

九州のほぼ中央に位置し、久住連山と阿蘇外輪山に囲まれ、豊かな緑と清らかな水に恵まれた、熊本県の小国町。人口1万人、農林業を中心に6つの温泉を観光に生かした山あいの町です。山村の現状はどこも同じ、過疎そして農林業の不振から多くの課題を抱えています。

### 2. 木の持つ豊かな感情を表現

1983年、町長に就任した私の机の上に、

町民グランド「林間広場」の設計書が置かれていました。この「林間広場」は杉と松に囲まれ緑豊かなグランドです。設計書のページをめくりながら、この施設の管理棟がブロックづくりであることに驚きました。さっそく、担当者を連れて現地を訪れ、「この杉と松の林にはブロックよりも木造の方が合うと思うよ。」と、担当者に木造への設計変更を指示しました。

「林業は不況だ」といいながら、いったい林業地はその不況を脱するためにどんなことを行ってきたのだろうか。小さな林業地である町や村がふと回りを見回したとき、庁舎、学校、公民館などの施設にどれだけの「木」を取り入れているだろうか。よそのまちと同じか・タ・チをした学校が建てられていないか、木造の需要拡大のために何を提案したのだろうか……。

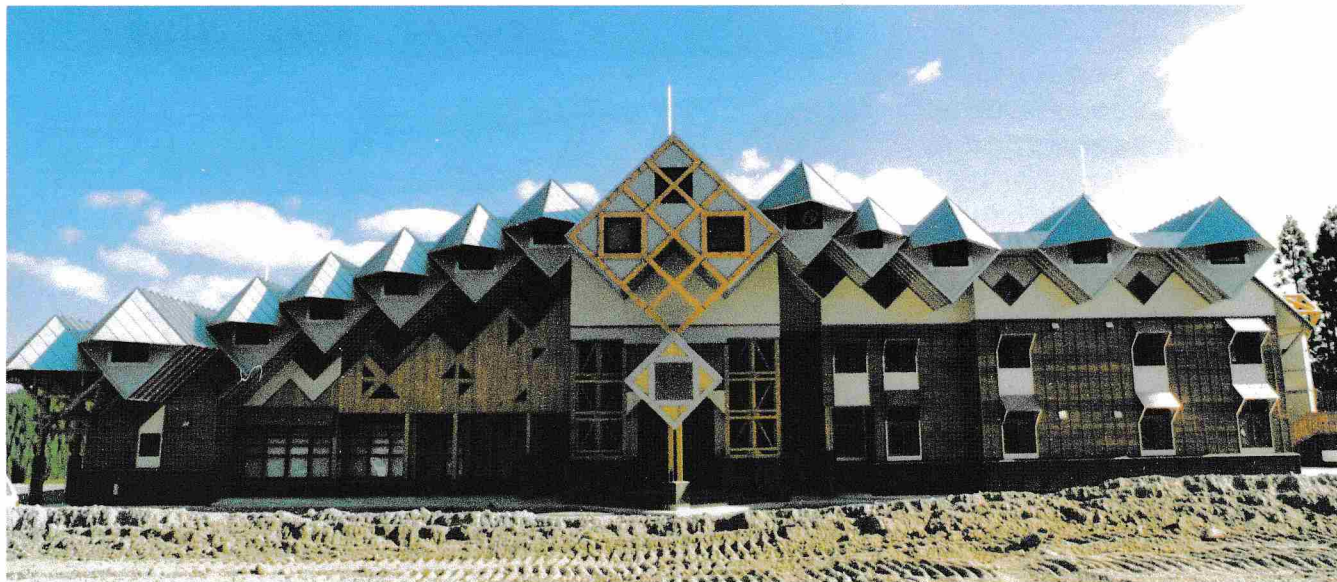
1984年、長年親しんだ国鉄宮原線は、国鉄の民営化への移行に伴う赤字ローカル線のトップをきって廃止されました。この駅跡地に何を表現していくのか……

私は建築雑誌を読むのが好きです。時間の合間には、「新建築」や「アーキテクチュア」などのいろんな雑誌のページをめくっていました。そんなとき、建設デザイナー葉祥栄さんの「光格子の家」が印象深く残りました。また、葉さんがデザインした熊本市の「上通りパビリオン」を見たときに、水・光・風などの自然を表現しようとする姿勢に強く魅かれました。実際に葉さんに会い、話してみるとその幅広い知識や自然の秩序を愛する人生感に人としての魅力を感じるのです。

廃止となった駅跡地に「交通センター」が建設されることになりました。私は設計を迷わず葉祥栄さんに依頼したのです。

「風のそよぎや木もれ陽といった自然のニュアンスを大事にしたデザインを、いつも心がけたい。」とする建築デザイナー葉祥栄さんの図面に引かれたのは、三角形の3つの辺に角材を使う「木造立体トラス構法」「ボールジョイント」というスチールの継ぎ手を軸に分子構造的に角材を組み立てるも

木魂館





のです。曲げに弱い木材に対して、この構法は軸方向の力しか加わらない三角形の集合体でいろんな変化にとんだ空間を演出できます。つまり、力が木の繊維と平行してしかも分散して加わるので、細い木でも折れないのです。しかし、特殊な構法の本造建築は法律で規制されていました。この建築基準法第38条の規定に対して、葉祥栄さんを中心にスタッフは様々な実験データを集め、それを基に建設大臣の審査をパスしました。駅跡地に登場したのは、外壁は全面ミラーガラス張り、逆円錐台形の2階建ての交通センター「ゆうステーション」さらに同じ構法で「林業総合センター」、町民体育館「小国ドーム」を建設。この「小国ドーム」に足を踏み入ると、無機質の鉄筋コンクリートと違って木の香りが漂い少しも圧迫感が感じられません。鉄とコンクリートにならされた私たちにとって、失われた感覚を呼び覚まされるような感動を与えてくれます。整然と並んだ三角形のトラスも杉並のような立体感を感じ、そこにも風が吹き抜けていくようです。木の持つぬもりや柔らかさが見事に表現されているからでしょう。

小国町ではこのトラス構法以外にも、「物産館」や「乳製品加工センター」など、在来構法による公共建築物を木造で次々と建設。

破傷風菌の純粋培養や血清療法の発見などで知られる、世界的な細菌学者北里柴三郎博士の生誕地の近くに建てられた研修宿泊施設「木魂館」は、この博士の生家を中心とした公園計画のコンペで優秀賞となった2つのグループが「北里計画チーム」を作り、何度も現地を訪れ、地元の若者たちと語り、酒を酌み交わしました。北里の素朴な風景に魅かれた計画チームは、その地方の土蔵の置き屋根式をヒントにボックス梁構法で「木魂館」を設計しました。この「木

魂館」は地域づくりの交流センターとして全国からの研修者が訪れ、人と人がぶつかり、人と人のネットワークが生まれ、まちづくりの舞台となっています。

### 3. 終わりに

のどかな田園風景と風情あふれる暮らし、山村というイメージはこのようにとらえかたでした。しかし、そののどかな風景だけ

では生活水準を高めることはできないし、ましてや若者が残る魅力はありません。都市的なセンスも必要なのです。建物はデザインでそのことを表現しやすいのです。

自然の秩序と調和した、個性のある山村文化、そして総合的なヒューマンアメニティの創造が暮らし方に魅力のあるまちづくりになるのではないのでしょうか。

ゆうステーション(外)



ゆうステーション(内)





## 都市環境デザインへの提言 —美しく、ゆとりある都市を目指して—

当協会の主張する「建築家、美術家、工芸家その他の人々の連携と協力により、建築に係る芸術的環境の創造と保存を図る」ことに関し、会員の意見・提案を受けて建設業界紙に発表することを企画実施しました。可能な限り多くの方々にお読みいただき、街づくりに当って少しでもお役に立てればと願っております。ここに連載第16回～第24回までの提案の概要等をご紹介します。

—美しく、ゆとりある都市を目指して—

⑩1989・11・29、市川 泰、Spaceについて：ニューヨークはマンハッタン5番街の某店舗の印象、グッゲンハイム美術館の改装、セントラルパークのモニュメント・彫刻作品をみての感想、シカゴの中心街を背景にひとつの画面を作っている人・小動物・ヨットなど印象を紹介。

⑪1989・12・1、坂上みつ子、環境・伝統・コンピュータ(上)：いわゆる「環境論」はものを創る人間にとって、絶対的な矛盾をはらんでいるが、何もなくても現状が好転するわけではない。例えばゴミ箱をとりあげると、ゴミは捨てられるもの、と考えるのが素直であろう。ものを創る人間であると同時にゴミを出す人間としての自覚が新しい発想を生み出す手がかりともなるのではないか。生態係は複雑であればあるほど安定しているといわれる。都市もまたしかりで、色々なものが混沌としている方が活力にあふれている状態だという気がする。しかし、組織が複雑になると自分の投げた小石の波紋がどこまで広がるのか、なおさら見えなくなるものである。間違いに気付いたらすぐに過ちを正す勇気が失敗を補う唯一のものである。

⑫1989・12・5、坂上みつ子、環境・伝統・コンピュータ(中)：もともと文化は変化するものであり、伝統と云われるものはその時代に有用なものだけが受け継がれたものと考えれば、日常生活とは無縁となったものが、博物館でほこりをかぶり忘れ去られていくのはやむを得ない。幕張メッセで催されたアーバンインフラテックではアメニティフロントな展示コーナーがあった。アメニティには心の領域が関わるのであるから、本質的には企業の哲学を示して欲しい

ところ。一服のお茶に数時間をかける心のゆとりが欲しい。

⑬1989・12・8、坂上みつ子、環境・伝統・コンピュータ(下)：コンピュータと親しくつき合うようになって5年以上になるが、掌に乗るほどのマイクロチップなどで大変な仕事が出来てしまうというのが、いまだにピンとこない。人は易きに流れるということと、コンピュータは便利な機械であるから使えば使うほど人間の能力の方は退化してくるということである。変化のスピードは加速時に速くなり、人間の判断が追いつかなくなってSFまがいの社会も現実となってしまう。コンピュータを有能なアシスタントに育てるように。

⑭1989・12・22、児玉由美子、質の高い都市空間づくり(1)：地方自治体による彫刻の屋外設置が流行して久しい。芸術作品を外部空間に設置する事は、その作品の芸術上の評価とは異なった次元の様々な問題を発生させる。わが国に入ってきた西洋彫刻・銅像の概念と歴史について。

⑮1989・12・27、児玉由美子、質の高い都市空間づくり(2)：昭和53年神奈川県は「文化のための1%システム」と称して1億円以上の公共事業に1%の費用を上乗せして文化性と地域の特性をプラスさせる事業を実現。萩市国際彫刻シンポジウム、横浜市の歴史的な建物に光をあてるライトアップ実施。秦野市の芸術家を街づくりに参加させるための「まほろばアートフォーラム」など紹介。公共事業は大きいほど仕事が多断断化され全体が見えにくくなる。モニュメントの制作は、あくまでも(もの)の制作ではなく心を伴う共同作業である。デザイナーのイメージを尊重し、経済優先でない奉仕の精神も必要なのである。

⑯1990・1・26、鈴木昌道、ハーバード大学に招待されて：作品を通して私のランドスケープデザインに対する考え方を聞く、という形で招待された。説明に対しての反応は、伝統的モチーフを現代的に生かしてデザインする手法に対して強かった。ランドスケープの学生も建築や都市デザインの学生も一緒に模型製作を行っているなど、理想的な勉学の状態にある。美しい自然と古い街並み、現代建築、芸術、造園などが一

体となった都市としてボストンは美しい。

⑰1990・2・2、近江 栄、文化的創造に介入する“チカラ”の回避を：公共建築の設計者選定方式の改革が期待され、全国の地方自治体の中でも、文化度の高い首長、あるいは担当官の良識と勇気によって徐々に正常化が進められている事例(福島県と福島県建築士事務所協会など)がある。また、壁画、彫刻の制作者の選択に当っても大変なエネルギーと気配りが必要となっているが、チカラによらないでも、すぐれたアーティストが活躍できるチャンスが与えられるコミュニケーションの機関としてa. a. c. aが期待される。

⑱1990・2・9、横尾龍彦、東から西へそして東へ(1)：このタイトルは、元ケルン市立美術館長カール・ヴァベルク氏が私の西独巡回展のカタログのために書いて下さった言葉で、西欧化を急いできた日本人が今、何を表現して行かねばならないか、示唆に富んだ勤めをしている。それは、特有の伝統に目を向ける勇気とは彼らの由来と文化の根を意識すること、ヨーロッパ、アメリカを集中的に知識として取り入れ、あるいは彼らの芸術的思考と形象に西洋世界を取り入れはするが、しかし決してどんなことがあってもそれに支配されないことを要請する、と勧めている。21世紀の世界はいよいよユニバーサルになっていくだろう。無の文化を背負う我々は他文化を積極的に取り入れていく母性的受容の文化的特質によって世界の進化に貢献できるのではなからうか。

⑲1990・2・16、横尾龍彦、東から西へそして東へ(2)：1965年から東と西を往復して80年より西独に定住するようになって、自らの民族の根を突き詰めなければ国際場裡では対等に向かい合えない事が分かってきた。ドイツで制作しているのだからドイツの表現に染まればよい訳であるが、自らの表現衝動は全く別の動きをはじめたのである。外へ外へと向かうドイツの新しい表現主義は、その戦闘性と自己顕示性によって彼らの民族的傾向を明らかにする。一方東洋人である私はニルバーナ衝動が強く内へ内へと深く潜心していく傾きを持つ、東洋的態度は受け身である。東洋的東洋芸術の



ブルグやザルツブルクのアイアンワークなど看板や窓で相互依存を感じる。光に結ばれた連帯の街並みはミラノのギャラリーにもある。身近な隣人相互の連帯による街づくりが求められる。

●1990・5・30、芦原義信、21世紀への提言・都市環境：(社)日本建築美術工芸協会会長として建築家、美術家、工芸家が一致協力して21世紀に向かってわが国の都市環境の美化や文化化のために努力を続けている。最近のパリ、オルセーの美術館や硝子のピラミッドができたルーブル美術館をはじめバスチーユの操車場跡地の新オペラ劇場、サミット会議の行われたデファンスのグラウンド・アルシエ等の建築をみてきた。パリの地下鉄の入口、オペラ座の前の街灯、公園のベンチ、公衆トイレなど素晴らしい。わが国の建築家、美術家や工芸家にデザインの実力がないのかということ全くそんなことはない。デザインのチャンスがないのではない。帰国時、成田から東京に向かう際にみる風景は決して美しいとは思われない。街に入るといよいよ電柱、電線、柱上トランス、巻看板、袖看板、野立広告等々どうみても文化国家とは思われない種数のものがいやが上でも目に入る。そろそろ我々も売らんかなの商業優先の時代から都市環境の美化の時代へと推移してゆくべきである。(終)

## 記録

### 1990長野シンポジウム

(記念講演・シンポジウム・交流、見学)  
日時：平成2年7月21日(土) 午後1時半  
～午後5時、見学会は22日(日)  
場所：長野放送NBSホール(長野市岡田町131-7 ☎0262-27-3000)

#### 内容とスケジュール

総合司会 小池 保(NHK大阪放送局)  
歓迎挨拶 (社)長野県建築士会会長  
宮本忠長

1. 記念講演 13:20~14:40  
「地域の文化、景観について」  
東京国立近代美術館館長  
前 文化庁長官 植木 浩

2. シンポジウム 14:50~16:50  
「自然と環境」——ゆとりある美しい  
芸術的環境の創造へ向けて  
司会 内井昭蔵(建築家、協会理事)  
パネラー(五十音順)

芦原義信(協会々長、芸術院会員)  
市川健夫(東京学芸大学教授、長野  
県文化財保護審議会委員)  
多田美波(彫刻家)  
谷口吉生(建築家)  
宮本忠長(建築家、長野県景観懇話  
会委員)

#### 3. 交流の集い

○会場ホワイエにて、シンポジウム終了  
後30分程度(200名参加)。大塚製薬より  
清涼健康ドリンクの提供があった  
○18:20より「すき亭」にて地元関係者との  
交流を行った。(36名参加)

4. 研修見学会 7月22日(日) 8:00より  
16:00まで大型バスにて、参加者40名  
見学先：小布施町修景(8:40~9:50)  
長野県信濃美術館東山魁夷館(10:30~11:20)  
長野市立博物館(13:30~14:00)、更埴  
市総合文化会館(14:40~15:40)

主催(社)日本建築美術工芸協会  
後援 文化庁/長野県/長野市/長野県市  
長会/長野県町村会/長野県商工会議所  
連合会/信濃毎日新聞社/長野県建設工  
業新聞社/NHK長野放送局/信越放送  
/長野放送/テレビ信州/長野県デザ  
イン協会/日本建築学会北陸支部/長野県  
建築士会/長野県建築士事務所協会  
協賛 大成建設株式会社/東陶機器株式  
社/JIA長野県クラブ

### メタルワークの ストリートアート 第1回デザインコンテスト

趣旨：ゆとりある美しい街づくりを目指す  
建築家・美術家・工芸家その他の方々が集  
って(社)日本建築美術工芸協会を設立、その  
最初のデザインコンテストを実施するもの  
であります。わが国の街並みは本来、美し  
いものだったと考えておりますが、今日の  
都市環境における街並みは必ずしも美しい  
ものとは言えない状態にあり、人間が活動  
する場としての環境をゆとりある楽しいも

のにしたいと願っております。このような  
環境の創造のために屋外彫刻やタブロー等  
を除く街頭のベンチや郵便受け、照明灯、  
サイン、袖看板、地下鉄出入口等々、メタ  
ルを主素材にしたファニチュア類のアイデ  
アを募集、その優秀作品を展示し一般にア  
ピールしたいと思っております。また、優秀作品  
を実際に作っての試作展示も考えておりま  
す。わが国にいる建築家や美術・工芸家そ  
してデザイナー志望の若い方々が多数応募  
されることを期待します。

主催/社団法人 日本建築美術工芸協会  
〒108東京都港区芝5丁目26番20号建築会館  
担当：調査研究委員会(委員長：池田武邦)  
共催/菊川工業㈱：〒130  
東京都墨田区菊川12-18-10  
☎03-634-3231

後援/文化庁(社)日本建築学会  
(社)商業施設技術団体連合会  
(社)日本美術家連盟  
(社)日本インダストリアルデザ  
イナー協会

事務局/社団法人 日本建築美術工芸協会  
デザインコンテスト係  
住所 〒108 東京都港区芝5丁目25番20号  
建築会館6階  
☎03-457-7998 FAX03-457-1598

#### ■写真の説明



表紙  
長野県小布施町  
©株式会社社新建築社  
撮影：小川重雄

発行：社団法人日本建築美術工芸協会  
Phone 03-457-7998  
Fax 03-457-1598  
〒108 東京都港区芝5-26-20  
建築会館6F

振替：東京 1-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会広報委員会  
柳澤孝彦(委員長)、宇津野和俊(副委員長)  
大多了介、小玉功、高部多恵子、玉見 満  
土屋 巖

製作協力：(株)SP建材エージェンシー



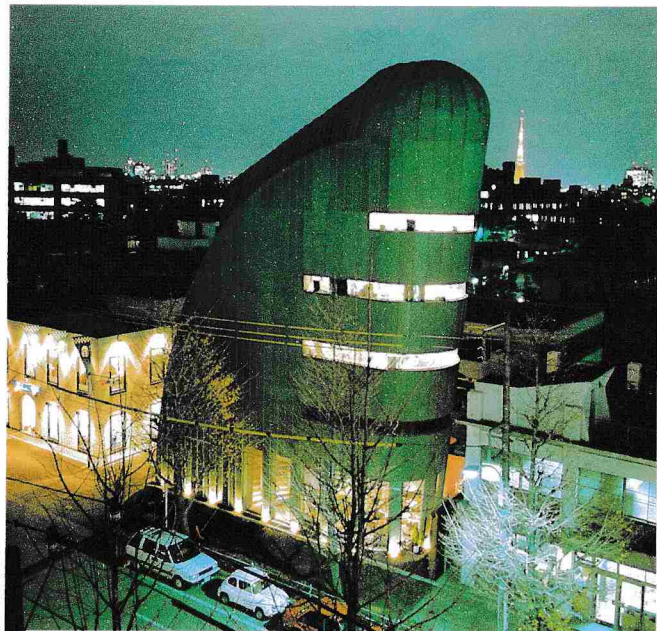
## 創造の「手」と「感性」で メタルワークの新しい可能性を追求する

産業界のあらゆる側面で、コンピュータをはじめとするハード&ソフトのハイテク化が進む一方で、人の個性や感性といったよりヒューマンなぬくもりが求められている現在、私ども菊川工業は、建築部門におけるメタルエンジニアリングの理想を目指し、職人の手わざを継承しつつ、現代技術との融合を図っています。そのひとつが、職人の卓越した技術をシステムティックに統合した大規模な「メタル工房」……ここからは、単なる金属加工物でない、「工業と芸術の接点」あるいは、「機能と官能との交点」とも言うべき文化的価値を秘めた作品が生まれてくるものと大きな期待を集めています。金属の持つ可能性を最大限に引き出し、創造的な感性と技術で建築界に更なるエポックを作りだそうとしております。

# 非 常 工 業

### 菊川工業株式会社

本 社 ● 東京都墨田区菊川 2-18-10 ☎ 03-634-3231 〒130  
 第 1 ・ 2 部 ● 千葉県印旛郡白井町白井工業団地7 ☎0474-92-0141 〒270-14  
 菊川金属工業㈱ ● 千葉県印旛郡白井町白井工業団地7 ☎0474-92-1141 〒270-14  
 キクカワM&E㈱ ● 大阪市西区北堀江2-9-20-102 ☎ 06-535-4381 〒550  
 テクノ・プラザ ● 千葉県印旛郡白井町白井工業団地7 ☎0474-92-0141 〒270-14



### UNHEX NANI NANI

(ユーネックス ナニ ナニ)

外壁パネル仕様 材質・銅板1.5% 仕上・緑青仕上  
 建設地 東京都港区  
 設計監理 基本設計・フィリップ・スタルク  
 実施設計・野沢誠+GETT  
 施工 六合建設㈱

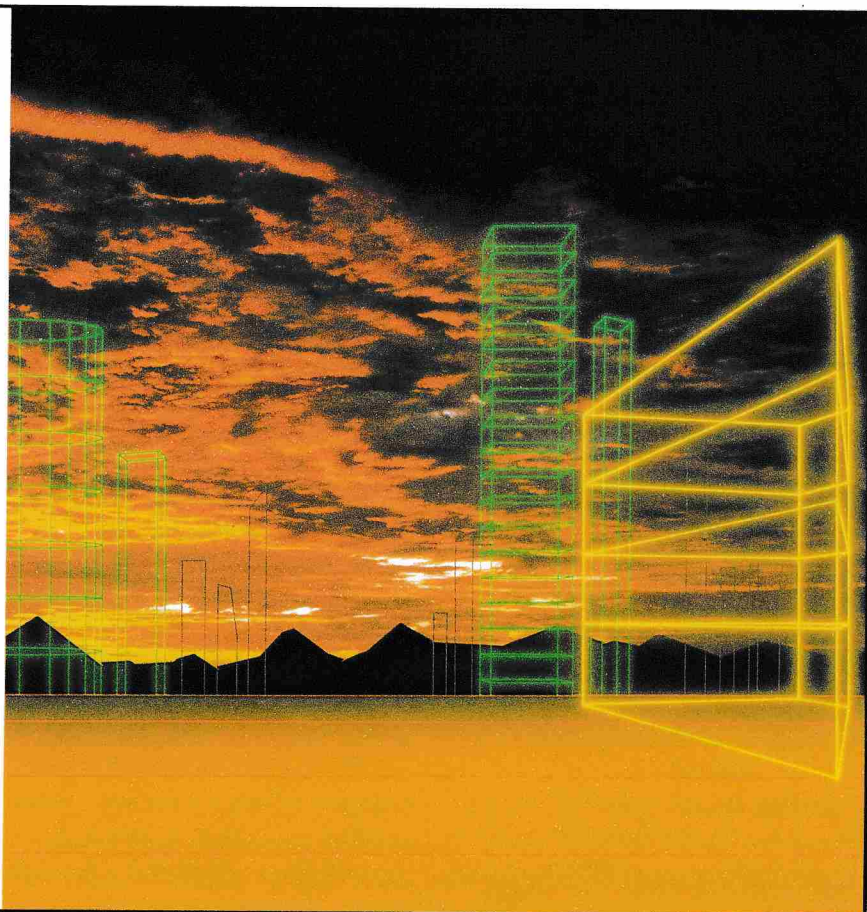
新しいデザインの建築は  
 未経験の工事を伴うもの  
 どんなビル建設にも  
 絶対かかせない防水工事  
 ゴムメーカーならこそ  
 初めて成し得た完全防水。



### 東洋ゴム工業株式会社

化工品事業本部・環境システム営業本部

東京本社 〒151 東京都渋谷区千駄谷4-24-15 TEL:03-404-6219  
 大阪本社 〒550 大阪市西区江戸堀1-17-18 TEL:06-441-8703





# 体温感響 ライブオフィス。

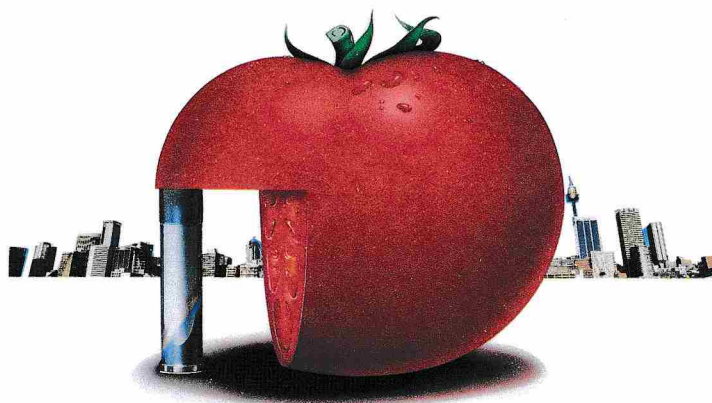
ワーカー視点と企業視点の調和を考えた  
未来型のニューオフィス。  
それがコクヨのライブオフィスです。

コンピューターに次世代の付加機能が求められている現在、ビジネスにおける仕事の効率や機器の機能性について根本的な見直しが行われ、それにとりまうオフィスの在り方にも新しいコンセプトが求められるようになってきました。コクヨは、いまのオフィスの現状や動向を研究分析した具体的ビジョンから、人を中心に発想され、人の能力を最大限に引き出す快適性、人の温かさ、感じ、響きのあるオフィスを提案。創造性あふれるライブオフィスづくりを推進してまいります。



## コクヨ株式会社

●本社・大阪統括本部・ショールーム 〒537 大阪市東成区大今里南6丁目1番1号 ☎(06)976-1221  
●東京統括本部・ショールーム 〒108 東京都港区港南1丁目8番35号 ☎(03)450-5111  
●支店/北海道 ☎(011)832-7631・東北 ☎(022)266-0594・横浜 ☎(045)323-2641・名古屋 ☎(052)951-6711・九州 ☎(092)715-2041



## メタルワークの ストリートアート 第1回 デザインコンテスト

募集開始	1990年6月26日(火)	審査員長	嘉門安雄 (プリチストン美術館館長、日本建築美術工芸協会副会長)
登録(応募の申込み)期間	6月26日(火)~8月31日(金)	審査員	栄久庵憲司 (インダストリアルデザイナー)
応募書の提出期間	1990年8月21日(火)~9月11日(火)	審査員	松本哲夫 (剣持デザイン研究所所長)
審査期間	1990年9月17日(月)~10月4日(木)	審査員	豊口 協 (東京造形大学学長)
結果の発表	1990年10月16日(火)	審査員	柳澤孝彦 (建築家)
表彰式	1990年11月中旬	審査員	宇津野和俊 (菊川工業株式会社社長)

事務局 社団法人 日本建築美術工芸協会 デザインコンテスト係  
住所 ☎108 東京都港区芝5丁目26番20号建築会館6階  
☎03-457-7998 FAX03-457-1598





大型美術陶板「最後の審判」ミケランジェロ作 サイズ13700×12200mm EXPO'90「国際花と緑の博覧会」ダイコク電機株名画の庭 設計 安藤忠雄

## 大塚オーミ陶業株式会社

東京/〒101 東京都千代田区神田司町2-9 TEL.03(294)1388 大阪/〒540 大阪市中央区大手通3-2-21 TEL.06(943)6695 工場/〒529-18 滋賀県甲賀郡信楽町柞原926 TEL.0748(82)3001

【営業品目】●美術陶板●建築陶板●テラコッタ●吸音陶板●サイン、デザイン陶板●写真陶板●肖像陶板